

### 3. 日本保育学会における教師教育研究の動向

藤井穂高（東京学芸大学）

#### はじめに

日本保育学会は、「保育学界の発達を期し、保育の研究に関係ある個人及び団体の連絡をはかり、もって保育事業の進歩に貢献する事」（会則第2条）を目的として、1948年に創設された。平成14年度の名簿によると、会員数は3300人を超えており、わが国の教育学関連学会としては最も大きな学会の1つであるといえる。

本稿では保育学会の学会誌である『保育学年報』（1962年度～1990年度）及び『保育学研究』（1991年度に誌名変更、現在に至る）を主な手がかりに、「保育者養成」（研修も含む）に関する研究動向を探ることを課題とする。

ただし、本科研全体の中心課題である「教師教育」については、その外延を同定することが容易でなく、「保育者養成」においても同様の困難を伴うことから、本中間報告では、課題を次のように限定したい。

まず、同学会誌ではこれまでに3度保育者養成に関する特集が組まれていることから、その内容を検討し、保育者養成の課題・テーマ等を整理する。次に、幸いなことに、同学会誌には創刊号から今日まで40年に渡り文献目録が掲載されていることから、これに基づき学会の研究動向を探る。さらに、保育学会の出版物等からも研究動向の一端を紹介する。

#### 1. 日本保育学会学会誌の「特集」

『保育学年報』及び『保育学研究』ではこれまでに3度ほど保育者養成・研修に関する特集が組まれている。1982年の「保育者の研修」、1987年の「保育者養成」、そして2001年の「保育者の専門性と保育者養成」である。以下では、その内容および構成を見ることにより、それぞれのテーマの柱立てを調べることにする。

##### （1）1982年の特集「保育者の研修」

同特集の柱立てと各論文題目は次の通りである。

##### Ⅰ 保育者の研修をめぐって（総説）

##### Ⅱ 研修の機会

保育者研修と行政の役割／松江市の保育行政に貫流した保母研修施策／新しい所内研修／これからの園長に求められるもの

##### Ⅲ 園内研修

勤務時間を中心に考える研修／研修過程論と保育実践の分析／園内研修における保育者の成長／高島第一保育園の保育実践と保育者の研修

#### IV 研修の方式

ケース・スタディ方式による「集団不適応児の研修会」／幼稚園教諭のための現職教育プログラムの開発と試行

#### V その他

幼稚園教師教育の諸課題」

以上のように特集の諸論文は、主に①研修の機会、②園内研修のあり方と③研修の方式の3つの柱から構成されている。

「総説」(岡田正章)によると、幼児人口の著しい減少に伴う量的拡大から質的充実へという当時の時代状況のなかで、保育者研修の特異性(女性の占める割合の高さ、経験年数の短さ、短大中心の養成など)を踏まえた研修のあり方の模索が課題とされている。

### (2) 1987年の特集「保育者養成」

次に「保育者養成」を特集した1987年年報の柱立てと各論文題目を見てみる。

#### I 「保育者養成」について(総説)

##### II 保育者像と保育者養成

母親・保護者・大学教員のみた保育者像についての因子分析的研究／男性保育者の現状とその役割および問題点

##### III 学生の保育観とその変容

保育学生の意識／保育職に対する学生の意識の変化／保育者の指導観の形成と変容／これからの保育者養成を考える／養成校におけるエンカウンター・グループの導入に関する一考察

##### IV 教育・保育実習と保育者養成

幼稚園教育実習生に関する研究／教育実習の効果に関する実証的研究／幼稚園教員養成課程学生の教育実習と幼稚園教師のイメージの変化との関連について／教育・保育実習生における原因帰属／効果的な幼稚園教育実習指導について

##### V 保育者養成—外国と歴史の中から

イギリスの保育者養成に学ぶもの／わが国の仏教系保育者養成校の原型について」

以上のように、各論文は、①保育者像、②学生の保育観とその変容、③教育・保育実習、そして④外国研究・歴史研究という柱立てに分類されている。「総説」(角尾稔)によると、「課題内容に即して」配列されたものであるが、「保育者養成の制度や内容」に関する

る論文がなかったとも述べられており、本来の構成にはこの柱も含まれていると解される。

### (3) 2001年の特集「保育者の専門性と保育者養成」

近年の2001年の特集では、その柱立てと各論文の題目は次の通りである。

#### 「保育者の専門性と保育者養成（総説）」

原著<論文>

保育者と身体性／保育者の専門性としての造形理解と幼年造形教育学の構築

原著<実践研究>

「ちょっと気になる子ども」の事例に見る保育者の変容過程／保育者養成課程における事例検討の在り方と手続きに関する一考察

原著<報告>

保育者における専門性としての「タクト」とその養成に関する一考察

原著<資料>

幼児や幼稚園教員に対するイメージの変容に及ぼす幼児教育心理学の授業の効果／現職保育者の大学院修士課程に対するニーズ／韓国における幼稚園教師の専門性を阻害する要因の分析」

以上の論文は、課題による分類ではなく、論文の性格により分類されているため、構成からはテーマの柱立てはわからない。しかし、「総説」（関口はつ江）によると、上記の研究論文等について、「現在の保育の専門性に関わる議論の主な観点」から3つに分類している。第1は、保育者の成長、変容に関する論点、第2は教育論、制度論に関するもの、第3は保育者の特性について、である。こうした分類の仕方も保育者養成の文献目録を作成する際の参考となろう。

なお、以上の「特集」の他に、1989年の『保育学年報』（第4部）では日本保育学会の40周年記念事業として行われた「幼児保育の検討に関する調査」の概要が掲載されており、このうち第8章が「保育者養成」（執筆は角尾稔）に充てられている。また1997年の『保育学研究』35-1の特集「日本保育学会50周年記念」に「保育者養成をふりかえって」がある（執筆は角尾稔）。

## 2. 保育関係文献目録にみる保育学会の研究動向

保育学会の学会誌には、1962年の創刊号以来、現在に至るまで毎年発表された保育関係の文献の一覧が収録されており、本科研の課題から見ても大変参考になる。ここでは、文献の出典及び収集の方法、文献数、分類項目と文献の内容、今年度の文献一覧の内容の順に若干の考察を加える。

### (1) 文献の出典及び収集の方法

「保育関係文献目録」に収録される論文等は、当初（1962年～1968年）は「論文」と「単行本」に二分され、一時期（1969年～1970年）は「保育雑誌」「紀要論文」「単行本」の3区分となり、その後は「保育雑誌」からの収録がなくなり、1992年以降は「単行本」の収録もなくなり、現在では「紀要文献」のみが収録されている。

文献の収集については、1963年から各大学への照会が始まり、その後現在まで、「保育を研究している大学、短期大学、専門学校、研究所に照会し、その回答に基づき収録」（『保育学研究』40-1、116頁）する方法がとられている。

収集対象となる論文が掲載されている雑誌・紀要等の数は、たとえば1969年年報では「保育雑誌・保育関係雑誌」が計60誌、紀要は計47誌で、紀要のみとなる1993年年報では212誌にのぼる（1994年度から紀要数に明示なし）。また、1973年年報（「保育雑誌」がなくなる）でみると、61誌の大学紀要のうちほぼ半数に当たる31誌が短大紀要である。

### (2) 文献数

各年の文献目録に収録された論文等の数は、本論の最後に挙げた「別表」の通りである。1971年の年報は未確認であるが、その数は1500件近くにのぼる膨大なものである。

紀要論文を中心に論文数の推移を見ると、1980年代からほぼ20件を超え始め、90年代後半では50件を超える数にのぼり、近年の研究の広がりが確認される。

### (3) 分類項目と文献の内容

保育者養成に関係する分類は、最初から「保育者」（1962年～1996年）という項目があり、1997年以降は「保育者・保育者養成」（1997年～）に変更されている。ただし、「保育者」には「親」も含まれており、「保育者」から「親」という項目が独立するのは1985年以降である。

また内容的には、「養成」にかぎらず、教員の身分や勤務条件に関するものも含まれており、さらに『最新全国保母国家試験受験案内・試験問題解答集』など学術論文以外のものも少なからず収録されている。

### (4) 今年度の文献一覧の内容

今年度（2002年度）の「紀要文献」を見ると、「平成13年4月から平成14年3月まで」に発行された紀要のうち、「保育者・保育者養成」の項目に分類されている論文は52件である。

各論文の題目に表れるキーワードを手がかりに、筆者なりの分類してみると、次のようになる。なお分類の際に着目したキーワードの一端をカッコ内に示す。

- ・保育者の資格 「戦後の保育者の資格」
- ・保育者の意識 「保育者の意識」「保育者の育児意識」
- ・保育者の特性・役割 「保育者のコミュニケーション方略」「保育者の役割」
- ・カリキュラム論・授業改善 「保育士養成カリキュラム」「幼児教育職教育カリキュラム」「教授法の実践」「授業の工夫」
- ・科目・領域別の教育法 「ピアノ指導法」「鍵盤楽器指導」「人権教育科目」「今サード活動」「表現ⅡA」
- ・社会福祉 「社会福祉援助者論」
- ・実習指導 「教育・保育実習」「保育所実習」「保育科学生の教育実習経験」「実習ストレッサーとストレス反応」「教育実習事前指導」「教育実習支援プログラム」「施設実習」
- ・学生の意識 「短期大学での二年間の学び」「学生の意識」「学生の労働観」「保育科学生の意向調査」「保育科学生の保育者観」
- ・学生の実態 「短大生の体脂肪率」「中学・高校における保育学習経験」「保育科学生の文章表現力」

この他にも、「土踏まず測定」や「卒業生の動向」など、題目からは分類しがたい論文も少なからずあった。

なお、参考までに同年度の文献の分類項目を以下に挙げておく。

保育理論／保育史／保育制度／世界の保育／心身の発達／保育研究法／テスト・測定／保育計画／保育内容（総論・一般／健康／人間関係／環境／言葉／表現／道徳・宗教／遊び／生活）／保育方法・保育形態／乳児とその保育／問題行動とその保育／障害児とその保育／心理療法／保育評価／保育者・保育者養成／親・家庭・地域社会／児童文化・文化財／多文化教育／保育環境／児童福祉・社会福祉／幼・保・小連携／その他

分類項目は、「その他」も含めて23項目であり、その内容は、理論・歴史、制度、外国研究、発達論、内容・方法論、保育課題別、児童文化、家庭・地域社会、社会福祉と多様であり、保育の世界の広がりがあるまま現れている。

### 3. その他

#### (1) 日本保育学会の刊行物

日本保育学会の刊行物については、50周年記念誌である1997年の『保育学研究』35-1に「日本保育学会主要刊行物」が整理されている(180頁)。

近年では、日本保育学会50周年記念として出版された『わが国における保育の課題と展望』(世界文化社、1997)に、第12章「保育者養成の現状と課題」(角尾稔、黒田瑛)と第13章「保育者の資質の向上と現職教育」(高杉自子、待井和江)の各論文が集録され

ている。

また、毎年大会時に大部の『研究論文集』が作成されており、研究動向を知ることができる。

## (2) 学会の陳情・要望等

同じく『保育学研究』35-1に保育学会の「建議・陳情・答申一覧」が整理されている(181頁)。直接保育者養成に関係するものとしては、「幼稚園教員養成制度の改善に関する陳情書」(1957年8月、中教審会長宛)、「保母養成制度改善に関する陳情書」(1958年7月、厚生省児童局長宛)、「『保育者養成の問題』について回答」(1975年9月、日本学術会議宛)、「教育職員免許基準の改訂案に関する要望」(1984年1月、教育職員養成審議会宛)などがあるが、最も新しいものでも最後に挙げた教養審宛の要望であり、ここ20年近くは行われていない。

## おわりに

本稿では、学会誌の「自由論文」における研究動向には触れることができなかった。そのためには、なにが「保育者養成」の論文に当たるのかについて検討する側の枠組みが前提となるが、それが現在のところ欠けているからである。

また、文献目録に掲載された論文の内容の分析にも至らなかった。これはその数の多さによるとともにその広がり大きさによる。

【別表】

日本保育学会学会誌の「保育関係文献目録」  
にみる保育者養成関係論文数

	論文		単行本			
62年版	59		0	87		21 8
63	35		2	88		5 16
64	40		0	89		21 11
65	48		2	90		18 4
66	33		0	91		13 11
67	77		6	92		18
68	59		3	93		28
	保育雑誌	紀要論文	単行本	94		38
69	67	7	0	95		37
70	56	0	2	96		54
71				97		52
72		11	6	98		43
73		5	4	99		56
74		13	2	00		58
75		13	1	01		64
76		7	6	02		52
77		13	3			単純集計 1494件
78		16	5			
79		9	11		注記	
80		10	7		・62年の当初より「保育者」という分類項目	
81		15	12		・68年度より「保育雑誌」「紀要論文」「単行本」の	
82		20	23		3種別になる	
83		23	14		・72年度より「雑誌」がなくなり「紀要」のみ	
84		29	16		・85年度より「親」という項目が独立	
85		28	22		・92年度より「単行本」がなくなり「紀要論文」の	
86		14	2		み	

・97年度より「保育者・保育者養成」に変更  
なお、71年度の紀要については未確認。